◎主な魚種の漁獲動向の見方

2025年までの新潟県全体、県北部(新潟市以北)、県南部(長岡市以南)、佐渡の年間漁獲量の推移を表したグラフです。

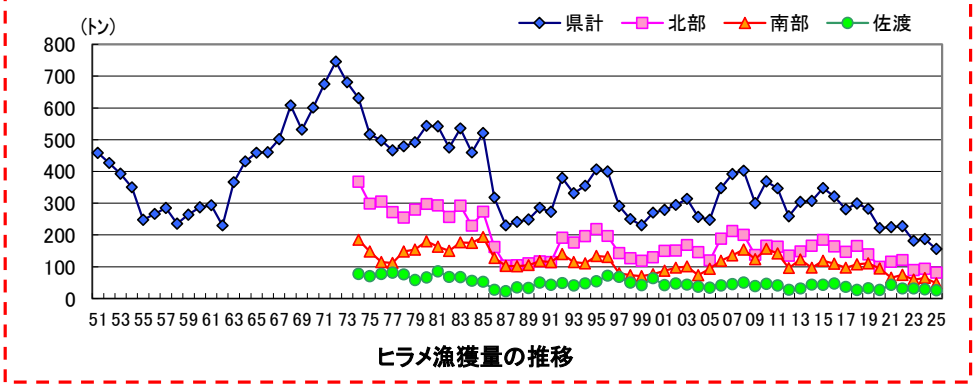
増加
横ばい
減少

◎漁獲動向
2026年の漁獲量の見通しを「増加・横ばい・減少」の3段階で示しています。

例

主な底魚類等の漁獲動向（2026）

○ヒラメ



ヒラメ漁獲量の推移

資源水準　漁獲動向

中位　横ばい

(2026/2025)
主要地区前年比
87%
(1～6月)

コメント、解説

・2025年の漁獲量は156トン(前年比83%)と前年並みで、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比87%で推移している。
・稚魚調査では、2022年生まれ及び2024年生まれの豊度が低かったが、2021年生まれ及び2026年生まれの豊度は高く、2023年生まれ及び2025年生まれの豊度は中程度であった。
・近年、中程度～高い豊度の稚魚発生が見られており、資源水準は中位、漁獲動向は横ばいとした。

主要地区における2026年の漁獲量累計について、2025年同期比として百分率で示しています。

高位
中位
低位

◎資源水準
漁獲量の推移と現在の漁獲努力量から「高位・中位・低位」の3段階で示しています。
なお、資源管理目標案等を提示した資源評価の対象魚種系群 については、国立研究開発法人水産研究・教育機構の資源評価に基づき、親魚量が目標管理基準値を上回るものを「高位」、目標管理基準値を下回り、限界管理基準値を上回るものを「中位」、限界管理基準値を下回るものを「低位」としています。

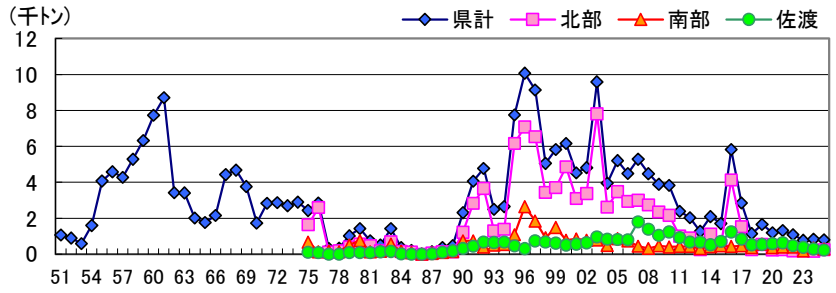
この資料における用語の定義

◆主要地区
魚種毎のコメントの末尾に地区名を記載しています。

◆主要定置網
山北、岩船、新潟、糸魚川、青海

主な浮魚類の漁獲動向(2026)

○マアジ



資源水準　漁獲動向

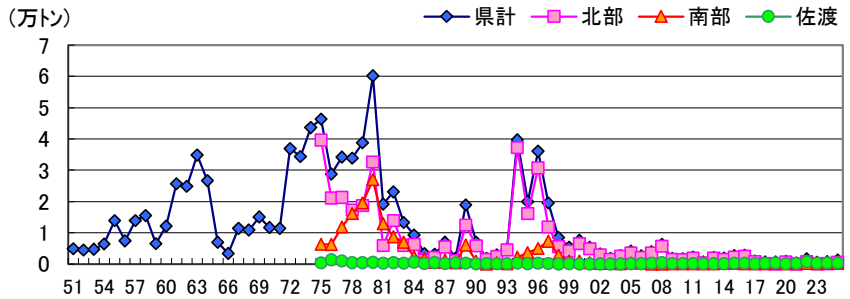
低位　減少

主要定置前年比
(2026/2025)
87%
(1～8月)

マアジ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は817トン(前年比97%)であった。まき網の水揚げの多寡により、全体の漁獲量は大きく変動して推移しており、近年、まき網による水揚げが減少し、定置網が大部分を占めている。
・主要定置網による2026年1～8月期の漁獲量は216トンで、前年比87%、過去5年平均比62%であった。
・水産研究・教育機構は、2026年の資源評価で対馬暖流系群の親魚量の動向を減少と判断しており、本県の漁獲動向も減少と見込んだ。

○サバ類



資源水準　漁獲動向

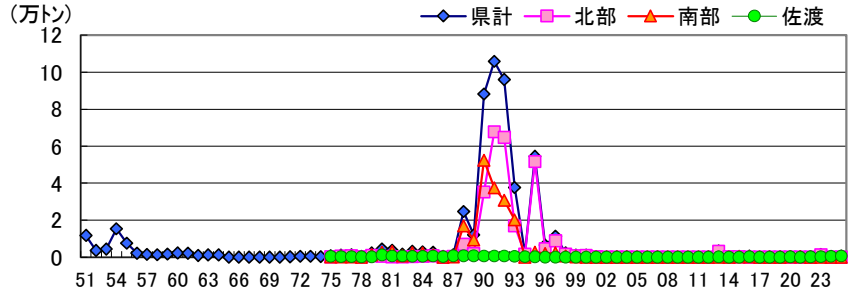
低位　増加

主要定置前年比
(2026/2025)
56%
(1～8月)

サバ類漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は1,261トン(前年比174%)であった。1994～1997年はまき網による水揚げが多く2～4万トンの漁獲量であったが、2009年以降はまき網による水揚げが減少し3千トン未満で推移している。
・主要定置網による2026年1～8月期の漁獲量は285トンで、前年比56%、過去5年平均比68%であった。
・水産研究・教育機構は、2025年の資源評価で対馬暖流系群の親魚量の動向を平年を上回ると判断している。本県の漁獲動向について、まき網では3～4月に、定置網では5月に好漁であったため、昨年を下回るものの平年に比べ増加と見込んだ。

○マイワシ



資源水準　漁獲動向

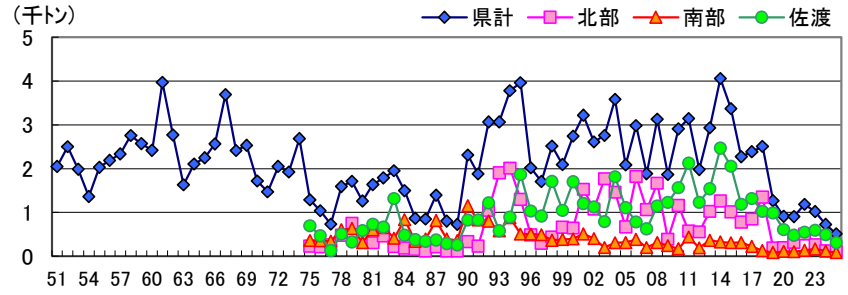
低位　増加

主要定置前年比
(2026/2025)
147%
(1～8月)

マイワシ漁獲量の推移

・1990～1992年は8万トンを超える漁獲量があったが、2001年以降は千トン未満で推移している。
・2025年の漁獲量は598トン(前年比113%)であった。
・主要定置網による2026年1～8月期の漁獲量は729トンで、前年同期比147%、過去5年平均比263%であった。
・水産研究・教育機構は、2026年の資源評価で対馬暖流系群の親魚量の動向を増加と判断している。本県の漁獲動向は主漁期である春季の漁獲が好漁であったため、増加と見込んだ。

○ブリ



ブリ漁獲量の推移

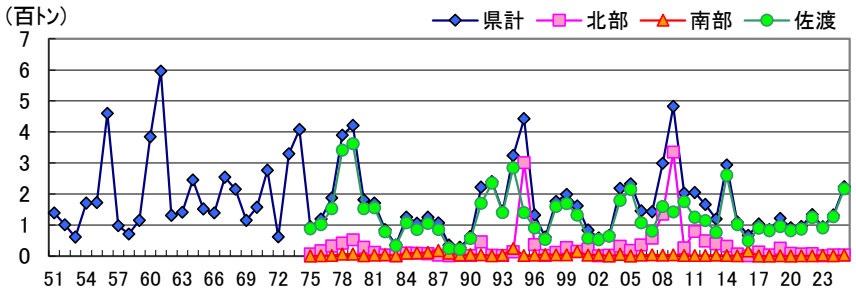
資源水準　漁獲動向

高位　横ばい

主要定置前年比
(2026/2025)
167%
（1～8月）

・全国的にブリ資源は高い水準にあり、本県の漁獲量も1990年以降、高位で推移した。
・2019年以降、主漁期における本県の海況がブリの回遊に適さず、漁獲量は落ち込んでいる。特に2025年は1951年以降最低の511トン（前年比70%）で、極端な不漁であった。
・水産研究・教育機構の資源評価では、これまで高水準であったブリ親魚量は2023年をピークに減少すると見込んでいる。
・2026年1～8月の主要定置網における漁獲量は185トンで、前年同期比167%であり、漁獲動向は横ばいと判断した。

○クロマグロ



クロマグロ漁獲量の推移

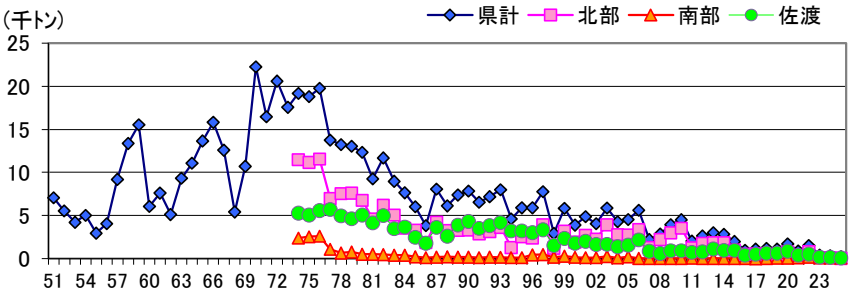
資源水準　漁獲動向

中位　減少

主要定置前年比
(2026/2025)
84%
（1～8月）

・2025年の漁獲量は223トン（前年比169%）であった。
・2018年からは漁獲可能量（TAC）が設定されており、漁業者が漁獲努力を抑える中で2026年度漁期（4～3月）の本県のTACは小型魚（30kg未満）が119トン、大型魚（30kg以上）が159トンとなっている。4～9月の漁獲量は小型魚が71トンで消化率60%、大型魚が123トンで消化率78%であった。
・北太平洋まぐろ類国際科学小委員会は、「クロマグロ資源は回復目標を達成した」と評価しているが、当県の漁獲枠は減少（小型魚126→119トン、大型魚161トン→158トン）しているため、漁獲動向は減少傾向とした。

○スルメイカ



スルメイカ漁獲量の推移

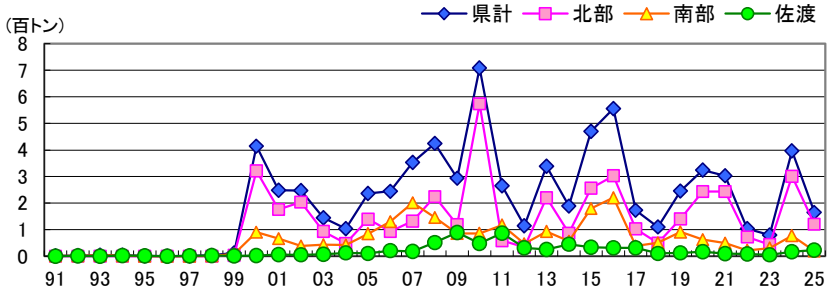
資源水準　漁獲動向

低位　減少

主要港イカ釣り前年比
(2026/2025)
165%
（5～8月）

・1998年から漁獲可能量（TAC）が設定されている。
・2025年は、全国で漁獲可能量を超過したため11月１日付けで小型いか釣漁業に採捕禁止命令が出た中で、当の漁獲量は223トン（前年比61%）であった。
・本県で5～8月の主漁期に漁獲されるスルメイカは主に秋季発生系群であり、水産研究・教育機構は2025年10月のスルメイカ幼生の分布調査で平均分布密度は過去最低としている。
・2026年5～8月の本県主要港（両津漁港、新潟港、岩船港、寝屋漁港）の小型いか釣漁業の漁獲量は36.2トンで、前年同期を上回ったが、過去5年平均比13%と低迷していることから、漁獲動向は減少とした。

○サワラ



サワラ漁獲量

資源水準　漁獲動向

中位

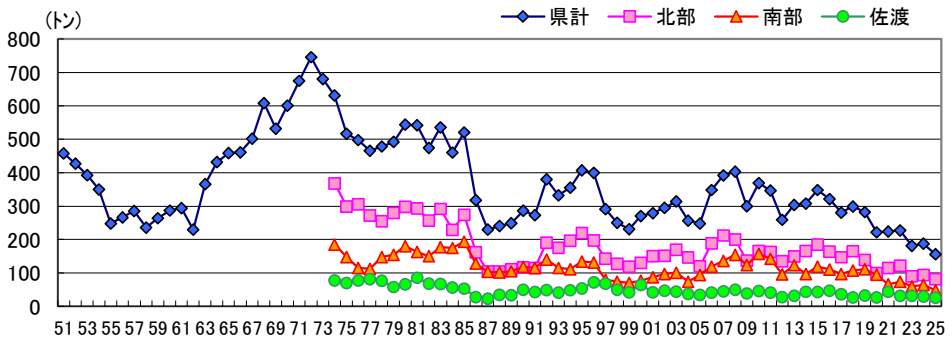
減少

主要定置前年比
(2026/2025)
25%
(1～8月)

・水産研究・教育機構の2025年における資源評価では、本県で漁獲される日本海・東シナ海系群の資源水準は中位、動向は横ばいとしている。
・2025年の漁獲量は165トン(前年比42%)であった。サワラの漁獲量は年変動が大きく、漁獲が増加した2000年から現在まで80～709トンで推移している。
・2026年1～8月の主要定置網による漁獲量は8トンで、前年同期比25%であった。サゴシ銘柄(1kg未満)、サワラ銘柄(1kg以上)ともに低調に推移している。

主な底魚類等の漁獲動向（2026）

○ヒラメ



資源水準 漁獲動向

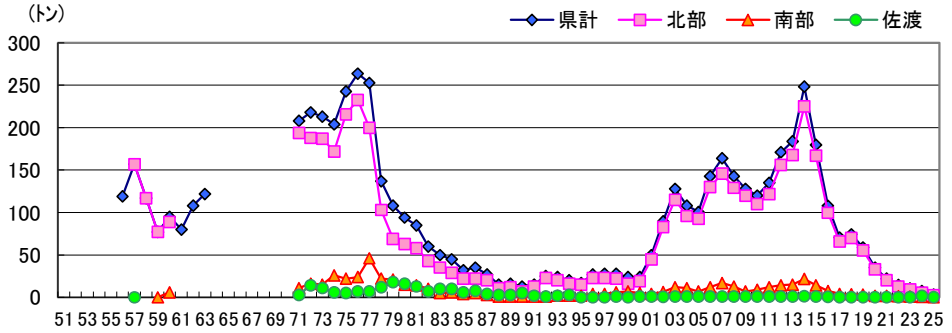
中位　横ばい

（2026/2025）
主要地区前年比
87%
（1～6月）

ヒラメ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は156トン（前年比83%）と前年並みで、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比87%で推移している。
・稚魚調査では、2022年生まれ及び2024年生まれの豊度が低かったが、2021年生まれ及び2026年生まれの豊度は高く、2023年生まれ及び2025年生まれの豊度は中程度であった。
・近年、中程度～高い豊度の稚魚発生が見られており、資源水準は中位、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区：山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○ヤナギムシガレイ



資源水準 漁獲動向

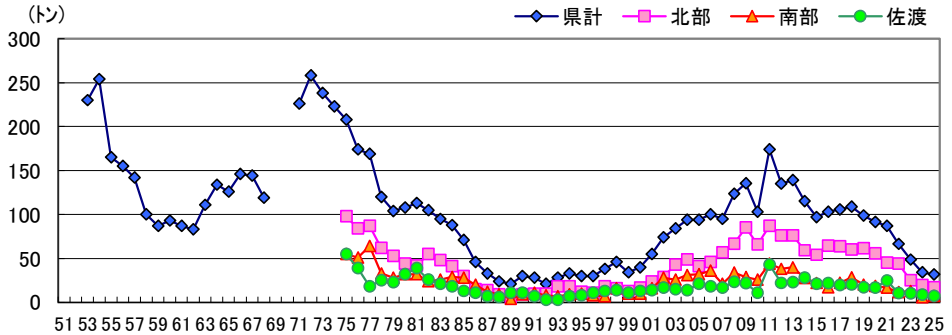
低位　減少

（2026/2025）
主要地区前年比
60%
（1～6月）

ヤナギムシガレイ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は3トン（前年比44%）で前年を下回り、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比60%で推移している。
・漁獲量は2014年（249トン）をピークに、この十年あまりで漁獲量は大幅に減少した。
・稚魚調査で2018年以降の稚魚発生は極めて低水準であること、市場における漁獲物の大部分が2015年以前生まれの高齢魚であることから、資源水準は低位、漁獲動向は減少とした。
※主要地区：山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○ムシガレイ



資源水準 漁獲動向

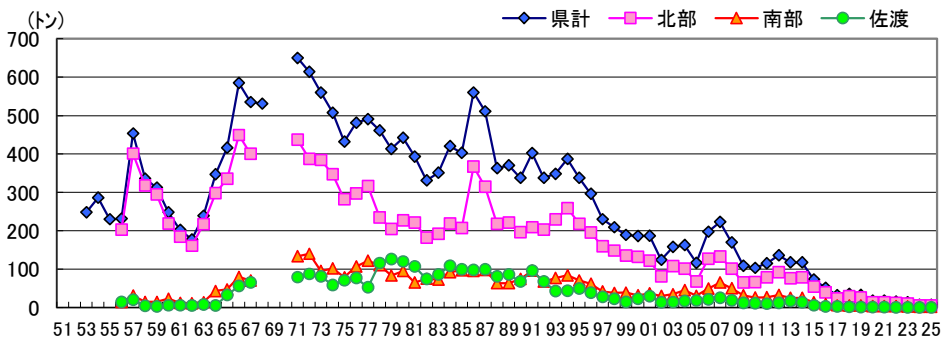
低位　増加

（2026/2025）
主要地区前年比
121%
（1～6月）

ムシガレイ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は32トン（前年比92%）と前年並みであった。
・漁獲量は2011年（174トン）をピークに、2023年には50トンを下回るまで減少し、資源水準は低位となっている。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比121%で推移しており、漁獲動向は増加とした。
※主要地区：山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○マガレイ



マガレイ漁獲量の推移

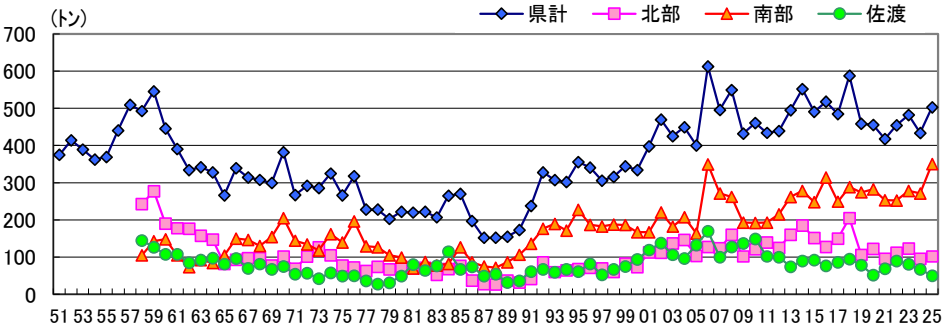
資源水準 漁獲動向

低位 横ばい

(2026/2025)
主要地区前年比
93%
(1～6月)

・2025年の漁獲量は7トン(前年比100%)と前年並みであった。
・2009年以降、漁獲量が150トンを下回る年が続いていること、稚魚調査で近年の稚魚発生が極めて低水準であることから、資源水準は低位と判断した。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比93%で推移していること、市場の漁獲物に2021年生まれなどの若齢魚も見られることから、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○マダイ



マダイ漁獲量の推移

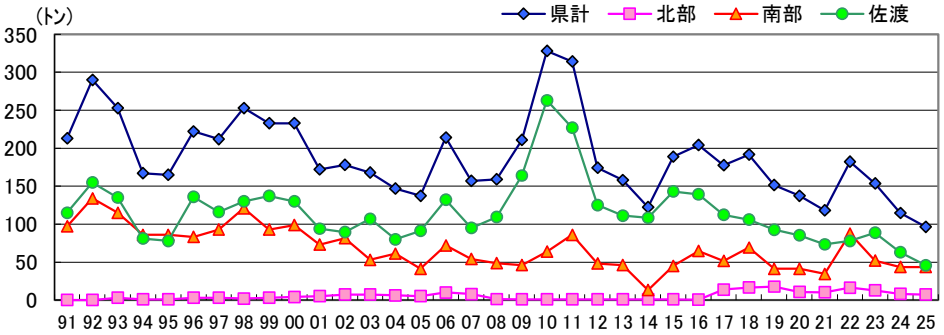
資源水準 漁獲動向

高位 増加

(2026/2025)
主要地区前年比
151%
(1～6月)

・2025年の漁獲量は503トン(前年比116%)と前年並みであった。
・2002年以降、漁獲量は400トンを超える高い水準を維持しており、資源水準は高位と判断した。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比151%で推移しており、漁獲動向は増加とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○ウスメバル



ウスメバル漁獲量の推移

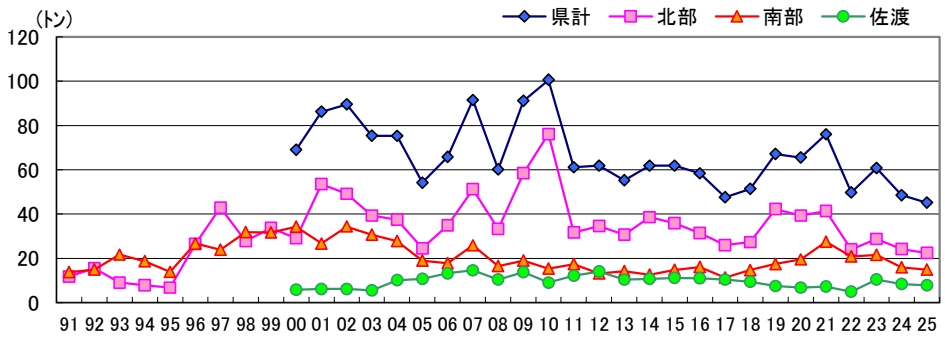
資源水準 漁獲動向

低位 減少

(2026/2025)
主要地区前年比
63%
(1～6月)

・2026年の漁獲量は97トン(前年比84%)で前年並であった。
・漁獲量が100トンを下回ったのは1991年以降初であり、最低値となった。
・2026上半期の主要地区漁獲量は前年比63%で推移しており、漁獲動向は減少とした。
※主要地区:名立、筒石、能生、糸魚川、佐渡

○アカムツ



資源水準 漁獲動向

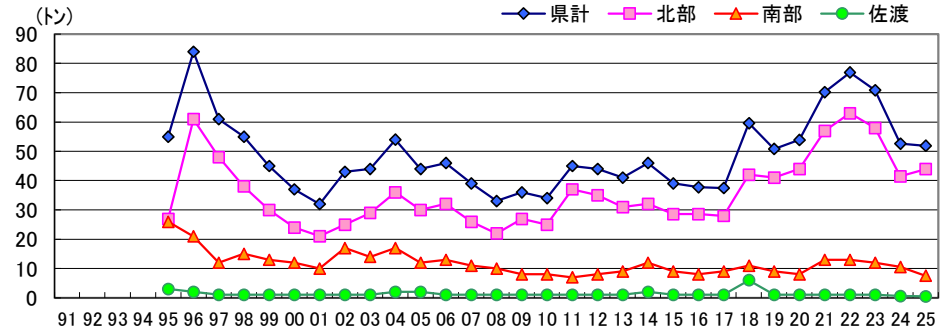
中位　増加

(2026/2025)
主要地区前年比
156%
(1～6月)

アカムツ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は45トン(前年比93%)と前年並みであった。
・2000年以降で最も少ない漁獲量であったが、新潟北部・南部の漁獲量(2025年の37トン)が低位だった1995年以前の漁獲量(1993年の31トン)を上回っていることから、資源水準は中位と判断した。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比156%で推移しており、漁獲動向は増加とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○アマダイ類



資源水準 漁獲動向

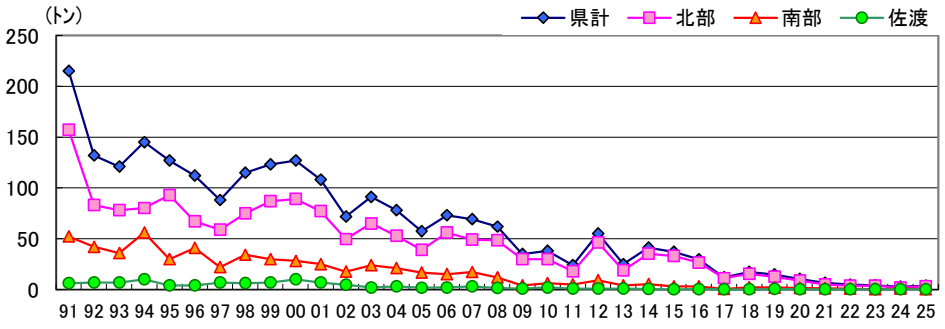
高位　横ばい

(2026/2025)
主要地区前年比
100%
(1～6月)

アマダイ類漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は52トン(前年比100%)と前年並みであった。
・2005年から2017年まで漁獲量は40トン前後であったが、2018年以降は50トンを超える高位水準で推移している。
・2021年以降の漁獲量増加は2018年生まれの豊度が高かったことが一因と考えられ、現在は大型魚となって漁獲されているほか、豊度がやや高いと見込まれている2022年生まれも漁獲されている。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比100%で推移しており、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○シロギス



資源水準 漁獲動向

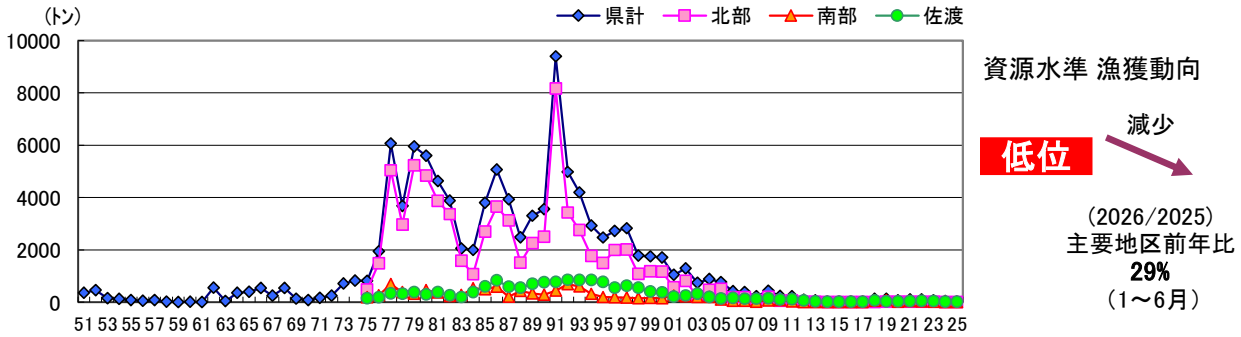
低位　増加

(2026/2025)
主要地区前年比
197%
(1～6月)

シロギス漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は4トン(前年比137%)で前年を上回った。
・2017年以降、漁獲量は20トンを下回る過去最低の水準にあり、資源水準は低位とした。
・漁獲量はわずかであるものの、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比197%で推移しており、漁獲動向は増加とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、筒石、能生、糸魚川

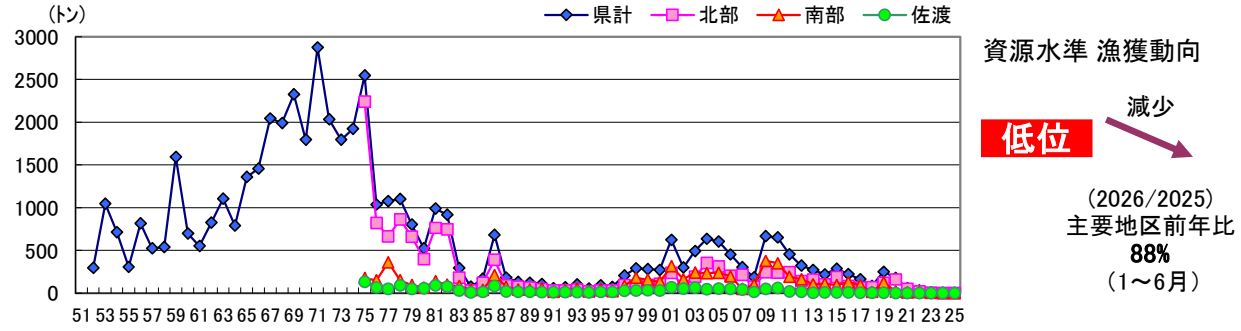
〇ホッケ



ホッケ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は15トン(前年比38%)で前年を下回った。
・近年としては豊度が高かった2017年生まれがとれた2018～19年は約130トンの漁獲量があったが、2024年から50トンを再び下回り、減少している。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価では、本県が属するホッケ道南系群の資源水準を低位としており、資源水準を低位とした。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比29%で推移しており、漁獲動向は減少とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

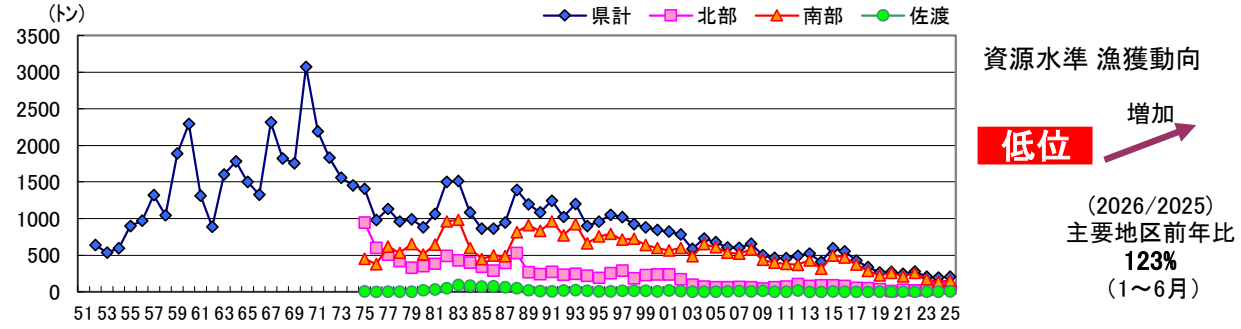
〇ハタハタ



ハタハタ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は1トン(前年比34%)と前年を下回った。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価では、日本海北部系群の資源水準を低位、資源動向を減少としている。
・本県の漁獲量も大幅に減少していることから、資源水準を低位、漁獲動向を減少とした。
※主要地区＝山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

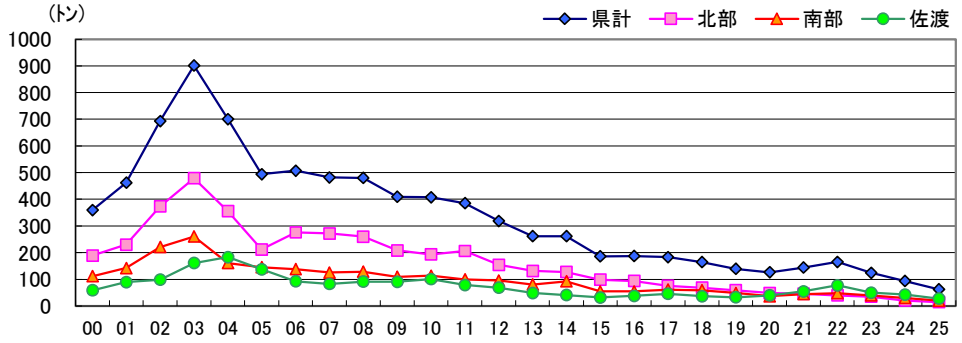
〇ニギス



ニギス漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は206トン(前年比105%)と前年並みであった。
・漁獲量は過去最低値だった昨年に次いで少なかったことから、本県の資源水準は低位とした。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価では、日本海系群のうち石川以西の日本海中西部の資源動向を増加、新潟沖を含む日本海北部を横ばいとしている。
・本県の2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比123%で推移しており、漁獲動向は増加とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、筒石、能生

○アンコウ



アンコウ漁獲量の推移

資源水準 漁獲動向

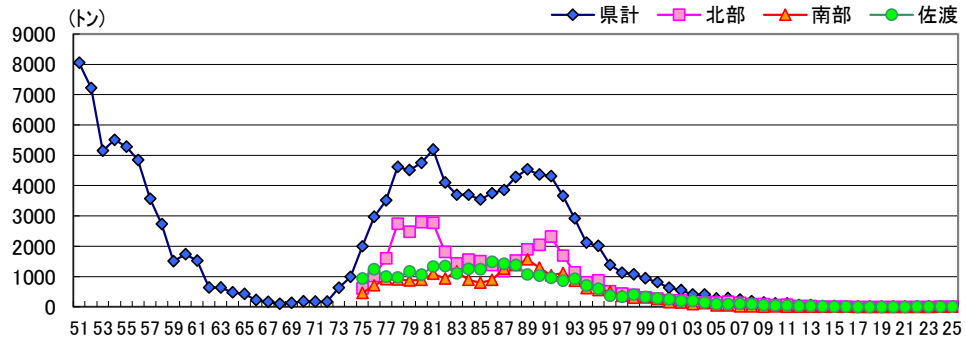
低位

横ばい

(2026/2025)
主要地区前年比
104%
(1～6月)

・2003年をピークに漁獲量は減少傾向が続いている。
・2025年の漁獲量は63トン(前年比67%)と前年を下回り、過去最低値であることから、資源水準は低位とした。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比104%で推移しており、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○スケトウダラ



スケトウダラ漁獲量の推移

資源水準 漁獲動向

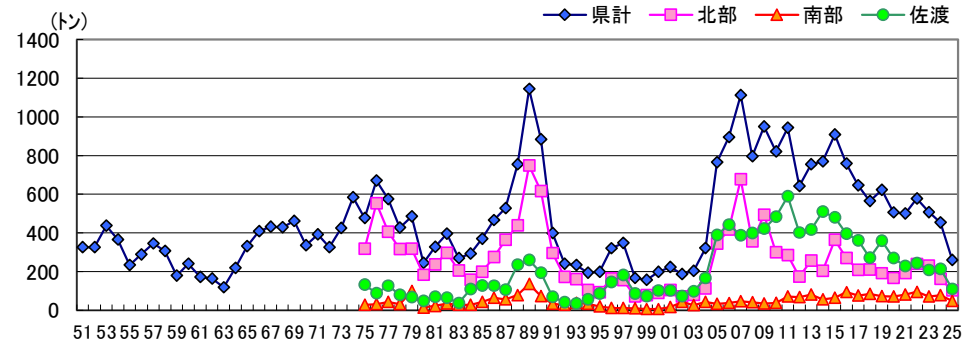
低位

減少

(2026/2025)
主要地区前年比
78%
(1～6月)

・2025年の漁獲量は9トン(前年比79%)で前年を下回った。
・1992年から漁獲量は減少傾向が続き、2012年以降は100トンを下回る最低水準であり、資源水準は低位とした。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価では、日本海北部系群の親魚量の動向を増加と判断しているが、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比78%で推移していることから、漁獲動向は減少とした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

○マダラ



マダラ漁獲量の推移

資源水準 漁獲動向

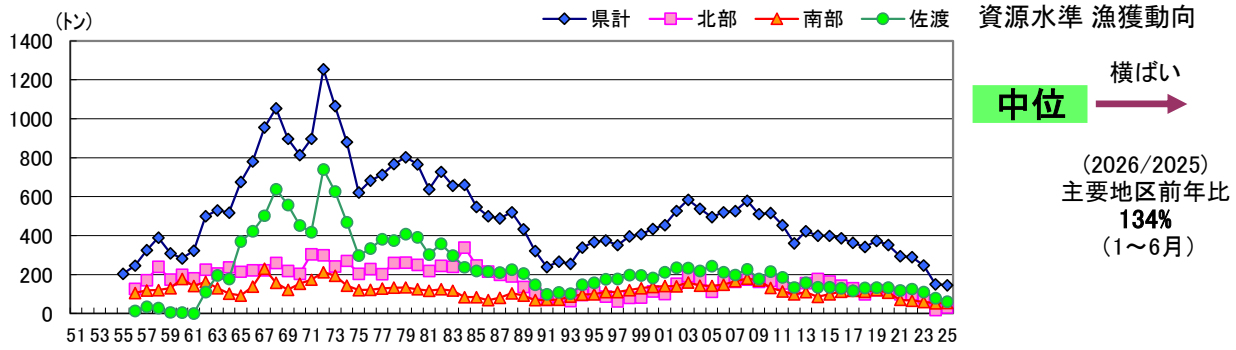
低位

減少

(2026/2025)
主要地区前年比
79%
(1～6月)

・2007年以降、漁獲量は減少～横ばい傾向で推移し、2025年は260トン(前年比57%)と前年を下回った。
・2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比79%で推移している。
・近年は豊度の高い2017年生まれが漁獲主体となっていたが、大部分は寿命等で漁獲対象から外れたと考えられる。加えて、稚魚調査の結果から2018年生まれ以降は豊度が非常に低いと見られ、漁獲量が急減したと考えられる。
・一方で、本年より2025年生まれと思われる小型個体が県内各地で水揚げされており、稚魚調査においても同様に採捕された。マダラは3歳前後から本格的に漁獲対象となるため、数年後から漁獲が上向いてくることが予想される。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川 、佐渡

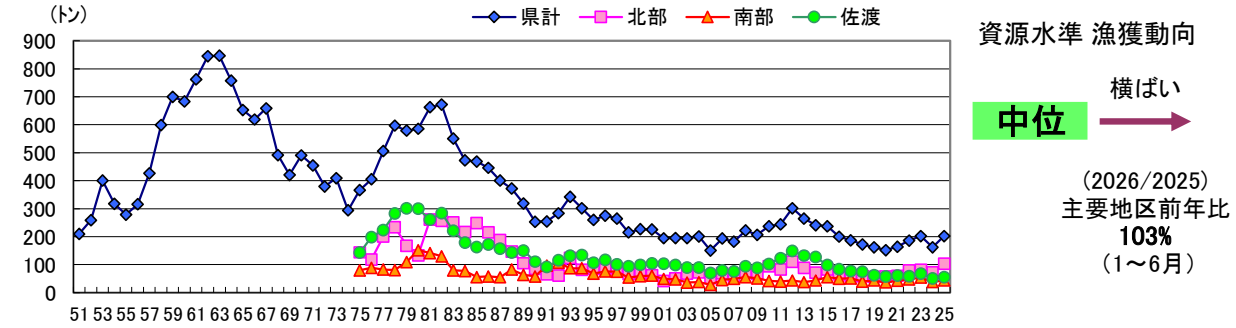
○ホッコクアカエビ



ホッコクアカエビ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は145トン(前年比97%)で前年並であり、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比134%で推移している。
・2023年から2024年の漁獲量減少は沖合底びき網漁業が1隻減少になったことが主な要因であるが、それに加えて局地的な漁獲量減少も確認されている。
・現状は2019年生まれ及び2021年生まれが漁獲の主体で、稚エビ調査の結果から2025年生まれの豊度が高く、今後漁獲加入してくると思われる。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価では、日本海系群の資源水準を高位、動向は横ばいとしているが、本県における直近の漁獲状況を考慮し、資源水準は中位、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

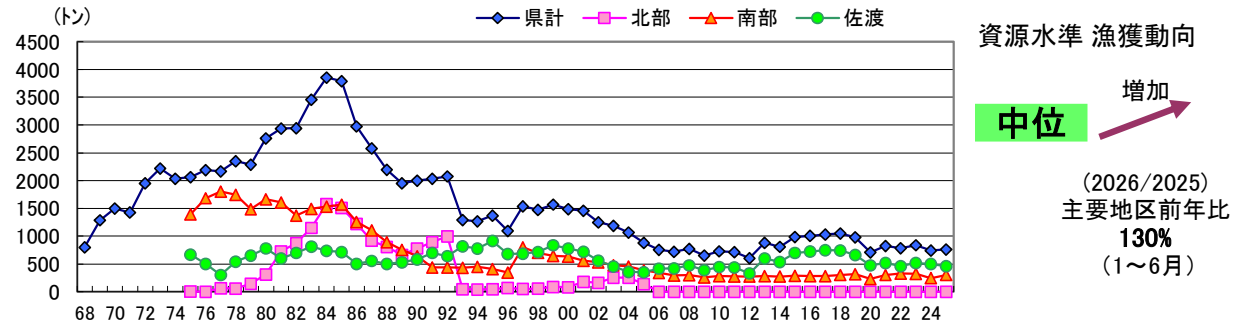
○ズワイガニ



ズワイガニ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は202トン(前年比124%)で前年を上回り、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比103%で推移している。
・漁獲量は2005年以降増加し、2012年をピークに減少傾向に転じていたが、2020年に下げ止まった。
・水産研究・教育機構の2026年度資源評価では、直近の資源量は高水準と述べられている。
・加えて、当所のカニかご調査でも漁獲対象個体(オス:甲幅90mm以上、メス:成熟個体)の採捕数が高水準を維持している。
・資源評価及び調査では資源が高水準であることが示されたが、本県における直近の漁獲状況を考慮し、資源水準は中位、漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区:山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

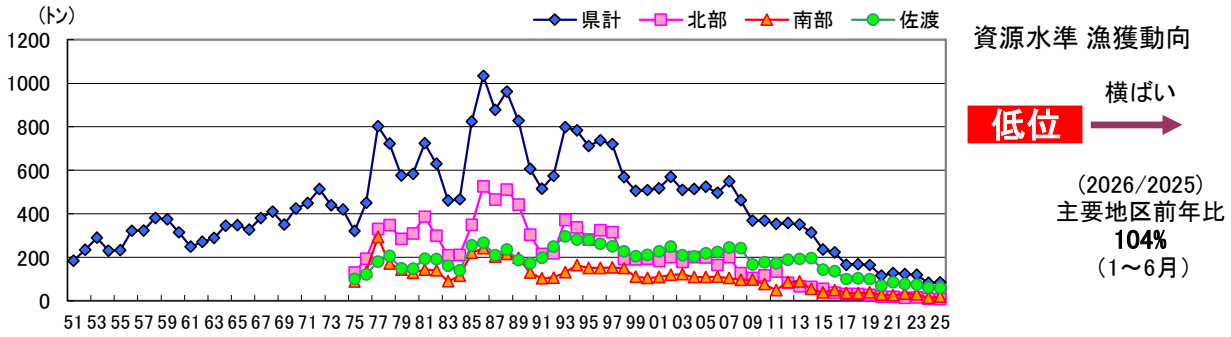
○ベニズワイガニ



ベニズワイガニ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は764トン(前年比103%)と前年並み、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比130%で推移している。
・漁獲量は1984年をピークに減少傾向に転じていたが、2005年頃から1000トン前後を維持している。
・水産研究・教育機構の2025年度資源評価の資源量指標値(単位努力量当たり漁獲量)は知事許可水域において高水準を維持しており、直近5年間の漁獲動向は横ばいとなっている。
・資源評価では資源が高水準であることが示されたが、本県における近年の漁獲実績を考慮し、資源水準は中位、漁獲動向は増加とした。
※主要地区:能生、佐渡

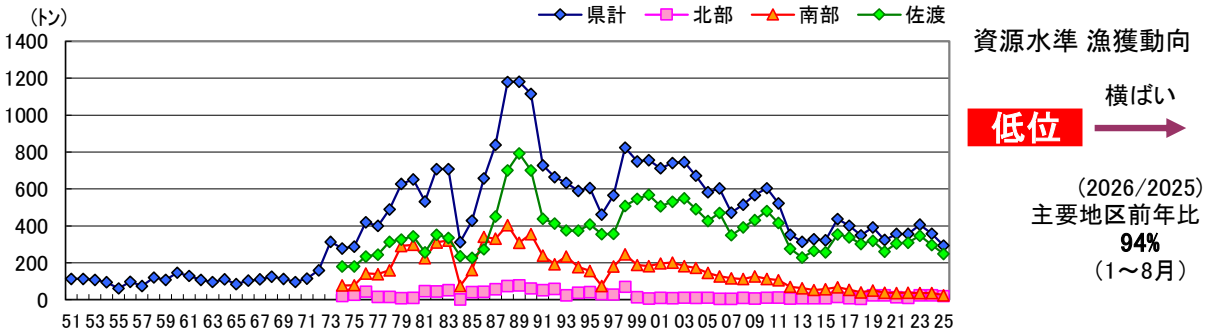
〇タコ類



タコ類漁獲量の推移

・本県におけるタコ類の漁獲の多くはミズダコが占めており、2025年の漁獲量は85トン（前年比104%）と前年並であった。
・漁獲量は1986年をピークとして長期的に減少が続いており資源水準は低位、2026年上半期の主要地区漁獲量は前年比104%で推移しているため漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区：山北、岩船、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川

〇サザエ



サザエ漁獲量の推移

・2025年の漁獲量は294 トン（前年比82%）で、2026年1～8月の主要地区漁獲量は前年同期比94%で推移している。
・漁獲量が1989年のピーク以降最も低くなったことから資源水準は低位、CPUEや資源量調査の結果は平年並みであることから漁獲動向は横ばいとした。
※主要地区：山北、出雲崎、能生、糸魚川 、佐渡

〇2025年主要8地区のその他魚種の漁獲量、前年比及び平年比

（主要8地区：山北、岩船港、新潟、出雲崎、名立、筒石、能生、糸魚川）

魚種	漁獲量(トン)	前年比	平年比（過去5か年）	地方名
アラ	19	92%	73%	
アカガレイ	26	66%	75%	
ソウハチ	53	85%	56%	シロアサバ
ババガレイ	2	63%	43%	ヤマブシ、ナメタガレイ
シログチ	32	81%	84%	イシモチ
スズキ	33	87%	68%	
チダイ	61	149%	116%	コダイ
ウマヅラハギ	69	119%	95%	コウグリ